

# Newsletter

僕らのライフスタイルサミット in 阿武

2016年2月21日(日) 13:30～17:00  
阿武町町民センター 参加者 200名

## 01 報告



## 02-03 講演



## 04 クロストーク





阿武町役場総務課石田さんより、阿武町の地方創生のこれまでと、これからの取り組みをお話いただきました。

### 阿武町の今

2015年の阿武町の人口は3千469人。毎年約200人が生まれて、

約800人が亡くなっています。つまり自然に毎年約60人が減っています。また、このまちで学べない・働けない・出会えないことを理由に若者はまちを出て、帰って来ない傾向があります。新生児から30代前半までの人数が極端に

少ないのはそのためです。他の世代に目を向けると、多くが町外へ働きに出て、町内で第一次産業に従事する人の平均年齢は70歳を越えます。町の基幹産業を維持するためにも、若者世代が町内に住み、働くことを選択できる環境を整えることが大切です。

### 阿武町版総合戦略の目的

総合戦略は、主に20〜30代の層を増やすことを第一の目的としています。この点が、全ての世代を対象とする総合計画とは異なる特色です。町外から人を呼ぶのはもちろんですが、今住んでいる人の「このまちに住み続けたい」、出身者の「いつか帰りたい」という思いを実現していくことで、一人でも多くの人が阿武町を人生の舞台として選択してほしい。そんな想いを込めて「選ばれる町をつくる」と名づけました。

石田雄一さん



### 3つの課題

戦略を策定するにあたっては1000人を越える人に意見を聞きました。たくさんのお話を聞いていくなかで阿武町の課題を分析して、大きく3つの課題があることがわかりました。

#### すまいの課題

町営住宅や駅前に唯一あるアパートは常に満室状態。分譲宅地に新築を建てるのすぐには実現できない。空き家は、空き家バンク上の登録数が多い上に、主に家族向けの提供であるため、単身者の居住は難しい。こうしたことから、まちに住みたいのに住めない、住み続けることができないという状況が生じています。空き家が流通しないのは、荷物や片付けなどの物理的な面と、貸す・手放すことへのためらいなど心理的な面に課題があると考えられます。

#### しごとの課題

田舎には仕事がないと言われますが、第一次産業を中心に季節に応じて人手が必要になる仕事がある町にはたくさんあります。一方で、短期でも働きたいというニーズは、子育て世代や、移住者などから多く上がっています。しかし、求人と求職の情報をつなげる仕組みが町内には無く、慢性的な人手不足・仕事不足が生じています。また、これらの求人情報はハローワークにはなかなか掲載されないため、移住・帰郷希望者にとっては転入前に仕事をみつけにくいという課題があります。

#### つながりの課題

まちにいる若者は町内で時間を過ごしたりしません。デートはもっぱら町外です（笑）そして、

中学3年生の約8割が町外の高校へ進むため、それ以後、まちとのつながりがなく、まちのことを知ることが少ないです。町外から奈古高校へ通学する高校生にも同様のことが言えます。

### 阿武町、こんなこと始めます！

〜8つの重点プロジェクトの中から3つをご紹介します〜

#### すまい▼空き家・ノートプロジェクト

持ち家を手放す決断をする際の心理的負担を取り除くプロジェクトです。空き家を貸したくない・貸せない心理的要因は大きく2つあり、1つ目が「補助制度や仕組み、家の相続や貸し借りに関する情報」が煩雑であり理解が難しいこと。2つ目は「思い出などがあがり、踏み切りがつかない」といった所有者の気持ちを動かすきっかけの不足です。そこに丁寧に対応するために、家を譲ることや貸し借りに関する情報を掲載し、かつ所有者の意向をまとめることができるノートのような媒体を作り、配布・活用することで、持ち家の今後のあり方の検討を後押しします。そうすることで空き家の流通を促進し、住まいの選択肢を増やしたいと思っています。

#### しごと▼14works（エンブリンノイワークス）プロジェクト

季節ごとの仕事を組み合わせ、新たな働き方を提案するプロジェクトです。季節ごと、つまり1年間ごとの仕事を組み合わせながら暮らすことを提案するため、この名前を付けました。「小さく・短く働く」ことに対する求人と求職を結びつける仕組みをつくることで、若者から年配の方までが人生のステージに柔軟に対応しながら、

「生涯現役」で働けることを実現します。将来的には、第一次産業以外の分野の求人情報も集め、町内の求職ニーズに添えるだけでなく、高校生や町を出た出郷者にも情報を届けることで「町で働く」という選択肢を作っていきます。

#### つながり▼AbuQuRo（アブクロ）プロジェクト

高校生を対象として阿武町の素材、例えば米袋や漁網などを使った袋づくりをするプロジェクトです。ものづくりを通じてまちを知り、愛着を育んでほしいと思っています。そして、その制作過程で出会う大人に共通する「地方で働く」という生き方に触れることで、阿武町で働くイメージを深めてもらおうと考えています。

#### 最後に…

これらのプロジェクトは自分たちが動けば「すぐにできる」ことを大切にしています。ソフト事業が多いのは、機運の高まりこそが共感と人を呼び込む時代だからです。これから取り組みを進めることで、ほしい未来を実現していきます！

阿武町版総合戦略および人口ビジョンは役場 WEB サイトからご覧いただけます





山崎亮さん

studio-L 代表。東北芸術工科大学コミュニティデザイン学科教授。地域の課題を地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わる。まちづくりのワークショップ、住民参加型の計画づくり、建築やランドスケープデザイン、市民参加型のパークマネジメント、まちなか活性化に関するプロジェクトが多い。H27 年度より阿武町の地方創生に携わる。

それは、ひとラボの他のプロジェクトにも共通して言えます。Tsuno (ツクロ) プロジェクトのような空き家の改修では、「手や服が汚れる」「遊ぶ時間がなくなる」「自分の家ではない」という意見もあるかも知れない。けれども、取り組みを通じて誰かと知り合い、技術を得ることができ、新たな発見が必ずあるはずなんです。

目に見えない経験やつながりがこそが大事です。

これは、ひとラボの他のプロジェクトにも共通して言えます。Tsuno (ツクロ) プロジェクトのような空き家の改修では、「手や服が汚れる」「遊ぶ時間がなくなる」「自分の家ではない」という意見もあるかも知れない。けれども、取り組みを通じて誰かと知り合い、技術を得ることができ、新たな発見が必ずあるはずなんです。

## ひとラボについて

studio-L (スタジオ・エル) の山崎亮さんより、コミュニティデザインの実践者の視点から阿武町の可能性についてお話しいただきます。



小豆島コミュニティアートプロジェクト

これからの阿武町にとっても、特に若者がつながり合い、自らができる仕事を増やしていくことが、町の原動力になります。

## 参考事例 ▼ 小豆島コミュニティアート

2013年に香川県小豆島で行われた瀬戸内国際芸術祭にコミュニティデザイナーとして参加しました。島内を歩いて巡る中で、廃材だったお弁当用の醤油のたれ瓶(容器)に、醤油を詰めて「醤油の壁」を作ることを思い付きました。いざ制作が始まり、3人1組で醤油を詰めるのですが、これが非常に単純作業なので(笑)、自ずと会話が生まれました。

その中でいいアイデアが出てきたらノートにメモするようにお願いすると、その中から次々と企画が立ち上がりました。メンバーは自主的に10社の醤油会社から醤油にまつわるものを借りて展示したり、島内にある269種類の醤油を全部寄付してもらって並べたり、展示施設を毎日交替で案内しました。さらに馬木地区では、醬(ひしお)会という組織が立ち上がり、カフェの営業利益をまちづくりの資金にすることにしました。

醤油の壁はカビがくるのでその後撤去されましたが、チームという作品は今も残り続いています。

チームという作品は今も残り続いています。

## しごとラボ

「Jobs (ヨンプンノイチワークス) プロジェクトは面白いですね。世の中には、春夏秋冬違う仕事をしながら生計を立てている人たちがいます。不安定な働き方ではないか?と心配になります。実は合理的な働き方なんです。四季にわたって「マズ」の仕事をする場合、どれかが景気が悪くなっても残りの「マ」をやり繰りしながら次の仕事を見つけることができる。そのような働き方ができるようになると、不安定どころか面白い生き方につながるのかも知れないなと感じました。

今では「仕事＝雇用」になっていますけど、この考え方が一般的になったのはここ50年くらいです。江戸時代まで遡ってみると被雇用者は労働者全体の7%と極々一部で、残りの93%は個人事業主でした。

しかし、昭和の戦後から会社が増え始め、「雇われている方が安泰だ」という概念が生まれます。この時代はGDPも増えて、仕事もたくさんある高度経済成長期でしたからね。そして現代は、働いている人の81%が被雇用者になりました。でもこれからの時代は人がどんどん減り、GDPもどんどん下がっていくかも知れず、雇用されている方がハイリスクになるとも考えられます。企業の寿命が平均で23.5年と言われている、この寿命は年々短くなっています。つまり、地方に企業を誘致してもいざ無くなってしまう可能性が高いのです。

だからこそ、これからは個人事業主を増やしていくべきと考えています。特に、地方においては、小さな仕事、つまり小商いができる人が増えることが長い目で見たら安定させます。

す。僕らのような外部の人間は、地域の人たちとその地域で必要な仕事を生み出していく力を備えたり、仕事を担保していくための仕組みづくりをお手伝いしていきたいと考えています。

## 参考事例 ▼ 観音寺まちなか再生計画

観音寺市の人口は6万2千人ですが、全国的な傾向と同様に、商店街はシャッター街になっています。その商店街のおっちゃん達は口を揃えて「この商店街には面白いものはない。」といいましたね(笑)。でも面白いもの、ありました。それは「お店の中にお店がある」ということです。下着屋さんにケーキ屋さんが入っていたり、クリーニング屋さんに餃子屋さんが入っていたり。この「Shop in Shop」の仕組みに可能性を感じました。お店を営業している人が、小さく起業してみたいという人に、自分の店の片隅を数千円で提供できそうだなと思いましたね。

それで1年間おっちゃん達とワークショップをして「どうやって」たら若い人と



観音寺まちなか再生計画



繋がるのか」を考えたんですけど、なんのアイデアも出ませんでしたね(笑)。おっちゃん達だけで若い人と出会う方法を考えるのには限界があることがよくわかりました。しかし、思いもよらぬところから仲間が集まることになりました。いじけたおっちゃんの一人が、

ワークシヨップ後ただ一人で飲んでいる写真をインターネットにアップしました。それが面白いと、じわじわと同じように真似をする人が増え、最終的には「今宵も始まりました」というフェイスブックグループが立ち上がり、今では1800人ものメンバーを抱えるようになりました。そこから若い人との交流が生まれて、加速度的にプロジェクトが進んでいきました。今では試験的な店舗も含めて数軒のShop in Shop が開店しています。

若い人たちがShop in Shop で小さく営業を始めてみて、上手くいったら自分で空き店舗を借りて開業すればいい。そして、そのお店の片隅を新たな人に貸すというスタイルが定着していくことを期待しています。

全国的に見ても、柔軟な発想で取り組みをしているのは若い世代の人が多いです。若い人の取り組みの先には、ベテランの人の将来もかかっています。若い人が活躍しない所はベテランの人苦勞します。だから若い人が頑張っていたら是非とも応援してあげてください。失敗することもあるかもしれないですが、その中の一つ二つがみなさん自身の生活を支えてくれたり、元気づけてくれるプロジェクトに発展する可能性があります。そして若い人と言っても30年、40年すると高齢者と呼ばれる人になるわけですから、自分の将来のためにもなるのです。

阿武町の総合戦略は、すまいのプロジェクトを含め、長寿社会に必要となる取り組みがきちんと掲載されています。

参考事例として我々のプロジェクトではありませんが、最近視察させていただいた宮崎県宮崎市の「かあさんの家」を紹介したいと思います。

かあさんの家は、「ホームホスピス」という自宅で終末ケアをするところで、僕より少し年上の女性が代表を務められています。意識が朦朧としている中で病院のような真っ白い空間で最期を迎えるのは「Quality of Death」という疑問から、自宅に近い環境で看取するということが大事ではないかと考えたそうです。ここまでは思い至る人もいるかも知れませんが、そのために彼女がとった方法が面白いんですよ。空き家をホームホスピスのために貸してもらおうとすると、ほぼ確実に断られてしまうので、大きな家で一人暮らしをしているおばあちゃんの面倒を見るから、「お

はあちゃん」と家を丸ごとセットで貸してほしい」と、息子夫婦にお願いしたのです。借り受けたのちに、キッチンやお風呂をリフォームして、新たに3人の高齢者を迎え、民間のホームホスピスに生まれ変わらせました。

中に入ると一般的なリビングや台所があります。食器も業務用のものではなく、そのお宅にあったものをそのまま使っています。壁は杉板や土壁で、床はキシキシと音を立てます。看取り期になると、患者さんはほぼ目が見えていないので、内装よりも大事なのは音。生活感のある音が心拍数を安定させる効果があるからこそ、施設を新設しなかったのです。

これらを見て、地域の人に愛されている方の家を選ぶそうです。地域の人から嫌われていた人の家だと失敗するそうです。つまり、良

好な関係性は、高齢者の一人暮らしがホームホスピスに変わってからも生きてくるのです。すまいラボのプロジェクトに共通する、その家を持つストーリーやつながりを大切に継いでいくという発想は、福祉的な観点からも重要であると言えます。



かあさんの家

出典：かあさんの家WEBサイト

そして、ホスピスとしての家の選び方がまた秀逸で、地域のコミュニティと一緒に何かに取り組んでいって、つながつて、一緒になって「自分たちのまちは自分たちの手で変えていこう」と思う人の数を増やすことが重要です。

僕はそのような人たちのことを「活動人口」と呼んでいます。今は、定住人口が減るならば、交流人口を増やしましょう、というのが世の中の掛け声です。例えば、外国の方を呼び込むことを「インバウンド」と呼び交流の促進を図っていますが、マナーの悪さなどから、地元の人に煙たがられているという報告をよく耳にするようになりました。地元負担がかかる上に、すぐに居なくなってしまう交流人口よりも、活動人口を増やすことに注力すべきです。

そこで大切なのは、「どんな人が増えてほしいのか」です。家賃補助や補助金を用意した結果、「あれも、これもやって」という無責任・要望陳情型の住民が増えるのでは、行政も地域のみなさんも困ってしまいます。阿武町がそんなまちなって嬉しいですか？僕はそんなまちは引越したくない。引越すとしたら、全人口に対する活動人口比率が高いところですね。その方が、友達や仲間が増えそうだから。今の若い人はそういうまちを狙っているということ、全国各地にお邪魔する中で肌で感じています。だから阿武町のみなさんには、人口が3千人を切ったらおしまいだ、とか思わないでいただきたい。無批判的に人口を増やすより、しっかりと考えて人口が減るほうが魅力的なまちができるという可能性があるのですから。

『21世紀の暮らし方研究所』の研究員になる人たちが今後阿武町の活動人口になる人たちだと思っています。次僕が来た時に、研究員が何人になっているか、すごく楽しみです。



3名のゲストと、引き続き山崎さんを迎えて、studioの西上ありささん司会のもとクロストークが行われました。

宇治茶の産地である京都府相楽郡和束町で、茶農家の援農体験しながら和束に滞在してもらい、農業をしてみたいと思う若者の後押しをして移住を促進する「ワツカナジカンプロジェクト」を手がける。故郷にUターン後、団体職員を2年半務め、去年合同会社「ゆうあんビレッジ」を設立。

昨年2月に東京から島根県浜田市にUターン。不動産リノベーションの経歴を活かし、市内の築80年、約120坪もの日本家屋を1年間かけて改装。1階はテナントスペース、2階は女性限定のシェアハウスで構成された多目的施設「さきや」を運営する。

街中を縦横無尽に流れる水路のように萩市に訪れる人と萩市の日常を繋ぐ場所にしたいという願いから、萩市初のゲストハウス「ruco(ルコ)」を営む。萩の歴史やまち並みはもちろん、そこに生活するガイドブックに載っていないような素敵な人・物・場所に触れ合ってもらおうべく活動中。

— どうやって地域に溶け込み、応援者や協力者を増やしましたか？ また共感を得る方法は？

岡本…家族に「何のために活動をしようとするのか」などの率直な疑問を投げかけてもらい、それに答える形で想いを伝えました。

山下…当初は、求人と人材のマッチングをする役割を理解してもらえず、「手配師」なんて呼ばれ方をされていました(苦笑)。だから、志が共通する茶農家さんや高校の同級生と取り組み始めて、仕組みを構築していきました。

— 年の離れた人にはどう伝えていきましたか？

岡本…「多目的施設」という言い方は自分でも少し曖昧な感じがすると思ったので、大家さんには若い人が共同で生活することで新たな出会いが生まれる空間を作りたいと説明しました。

塩満…僕は、熱量ですね。ただの「借り手と大家さん」という繋がりではなく、誠実な思いを持って自分のやりたいことをちゃんと伝えて「応援者」になってもらいました。ただ、「ゲストハウス」はなかなか伝わりづらくて気を遣いましたね。

山崎…どのような経緯で借りることになりましたか？

岡本…物件にもよると思うんですが、私の物件は、大家さんが思い入れがあるので解体はしたくないけれど維持が大変だと困ってらっしゃって、その時に私の申し入れとのタイミングが合ったので、借りることができました。

石田…室内を改装してもいいよ、というような借り方だったんですか？

岡本…「何がかわっても、何がなくなってもかわない」と約束をしていました。

西上…荷物が残ってた方が、レトロで素敵な家具があって30代の人は喜びますよね。

塩満…その改装中に、通りがかった人が「あそこも今解体してるよ」とか「うちも見にくる？」とか情報を提供してくださって、材料などもたくさん譲ってもらえました。

山崎…「分業」という効率的な働き方は、仕事分割にされているようで人間が断片にされている。この仕事の在り方は面白くないと人々はやがて気づくだろう」と150年も前にイギリスのジョン・ラスキンという人が言葉に残しています。みんなで壁を塗ったり掃除したりするのは非効率ではなく、このプロセスこそが楽しいですね。金銭的に得するだけでなく、この楽しさや手伝ってくれた友達への感謝が豊かさにつながると思います。

— 阿武町のプロジェクトのどこに可能性を感じましたか？

山下…実際の田舎暮らしは、身を投じていかないとイケなかったりするんですが、観光ではそれができない。我々のプロジェクトは仕事の空いた時間にまちを散策できたり、仲間同士で茶農家談義をしたりすることで、コミュニティに住む人がどんな人かを本当の意味で知ることができたり、まちの魅力がわかってきたりするんですよ。

西上…ちょっと住んでみたいという人には最高の情報収集の場ですね。

山下…「4work」にも同様の可能性があると思います。

— 他世代や出郷者との連携の可能性

塩満…宿泊される方に、近所にある昔から営業しているお店を紹介するんです。その後にそつとお店のオーナーに、今から向かった人たちをよろしく願いますって電話するんですよ。

まちのいろんな所に接点を持ってもらうことで、まちのイメージや関わり方が変化して、「まちに受け入れられてる」と感じてもらえるんですよ。

山下…僕もその泊まったんですけど、来る人みんな友達っていう雰囲気驚きました。岡本…さきやの場合、周りの人は「きれいなお店だ」と気にはかけてくれるんですけど、何をやっている場所なのか、いまいちわからないですよ。小売りはしてないので、市民の人が来やすいイベントをしていこうと模索中です。

石田…阿武町でも年末にタウン内で「お世話になりました展」という写真展をしたんですけど、「若い人の取り組みだから」と、当初なかなか中に入ってもらえなかったんです。でも若い人は若い人だけでやりたいわけではない。本当は、まちの人が中に入ってきて日常会話をしてくれるのが嬉しいんですよ！

— (会場) 不動産契約をしていると思うんですけど、何年で契約されているんですか？

岡本…どうにかしたくてしょうがない大家さんだったんで、最初は15年は借りてくださいって言われたんですが、今では6年にまで下げていただきました。

塩満…僕は何年という契約はしてないですね。

— (会場) 返してくれて言われたとき困るんじゃないですか？

塩満…確かにそうですね(笑)そこは心でいっしか！(笑)今まで築いてきたまちの人たちのつながりもあって、そこはそんなに不安に思っていないくて、絶対どこにかなと信じています。岡本…資金回収に何年とか、買わないと損するんじゃないか、と考える人が「形」にできる人なんだと思いますね。





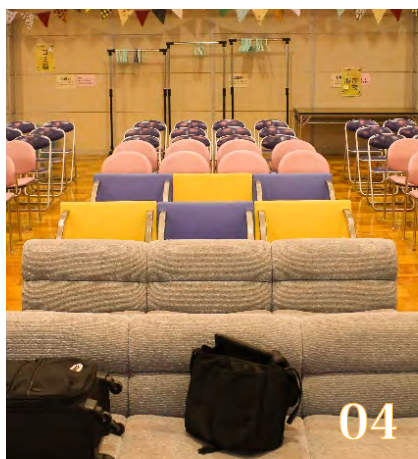
01



02



03



04

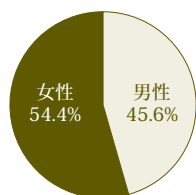


05

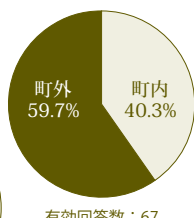
01：ご来場みなさんにリラックスしてお話を聞いていただくために、町内の飲食店のみなさんに軽食と飲み物をご提供していただきました。 02：和束町のお茶の試飲・販売もありました。お茶を使ったチョコレートの美味しさにはみなさん感動！ 03：スタッフ証代わりの蝶ネクタイは手づくり。おもてなしの気持ちを表現しました。 04：みなさんにくつろいでお話を堪能していただくためにソファ席も設置。 05：会場をカラフルに彩っていたガーランドは、この日のために集めた古着をリメイク。

#### 居住地

#### 性別

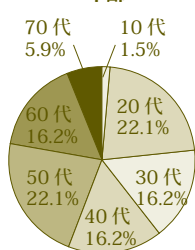


有効回答数：68



有効回答数：67

#### 年齢



有効回答数：68

#### 印象に残ったこと

ほしい未来を実現する・ないものは自分で作るという考え（10代 町外 女性）● 縮充という言葉（70代 町内 男性）● 限られた人口の中でも活動人口を増やすことで、活気づくということ（20代 町外 女性）● 頑張る若者の足を引っ張るな（50代 町内 男性）● 何かを始める際に結果にこだわるのではなく、そこで生まれる「つながり」が将来に生きてくる（20代 町内 女性）● これからが始まりかな（60代 町内 男性）● 大切なのは心だ！という若さ（20代 町外 男性）

#### 阿武町の地方創生の取り組みに一言

● できることから始める。どこかで手伝いますよ（70代 町内 女性）● 思いや願いを形にすると「理解されること」「共感されること」が大切であり、今日のサミットは若い力をベテランが支える集団作りのスタートになったと思う（匿名）● 目指せ活動人口3,000人！（20代 町外 男性）● 本日は本当に素晴らしい第1歩だと思いました！（50代 町外 男性）● 縮充していけたらいいなと思った（20代 町内 男性）

#### その他

● 地方創生の新しい流れを見聞きして気持ちが活性化された（50代 町内 男性）● 会場が素敵！おもてなしの心が素晴らしかった（20代 町外 女性）● 手作りの阿武町らしいサミットでしたね（30代 町内 女性）● あせらずに若い人の発想と行動を熱意だけ持って眺めたい（70代 町内 男性）● 阿武町に住み続けたいと素直に思った（20代 町内 女性）● 生き方や地域の中での住民の役割を共有する場が提供できる町は素晴らしい（50代 町外 男性）

Special Thanks: [ケータリング] 846 のみなさん、くさのみ舎 Liela さん、京都府相楽郡和束町のみなさん [託児] みどり保育園の先生方、子育てボランティアのみなさん [会場] ガーランドづくりにご協力くださった町民のみなさん [チラシデザイン] 小島由加里さん [撮影] 吉岡風詩乃さん [販売] 水津美乃里さん and more ...

ニュースレター発行：2016年3月 阿武町役場 編集：平田和佳（東北芸術工科大学コミュニティデザイン学科1年）、studio-L